



拾貳ヶ月恋々記

壺月

如月コウミ

*

大学生になって初めての冬がきた。

去年の今頃は机にかじり付いて縦横無尽にペンを振り回していたか、目にも止まらぬ早業で問題集の頁を捲り続けていたか、いずれかであった。心は熱く、そして寒々しかった。

世の人々は浮き足だって、傍らに恋人などを抱いて、きらびやかなネオン街を練り歩いているのだと思うと、家どころか自分の部屋の椅子から一步も離れることのできない自分の境遇を恨めしく思うのみだった。

来年は、来年になれば、きっと私の隣には麗しい美女が立っているのだろうと、そして暖かくラブロマンスに満ちた冬を過ごすのだと、そう言い聞かせて遂に合格した大学。薔薇の色をした未来が、ここから無限大に開けていると思い込んで、天真爛漫に過ごした8ヶ月半。

そうして1年が経過した。大学一年生の冬である。

正直に言おう、実に寒々しい。開けていたのは、去年の私に見せれば意欲を根こそぎ吸い取り、生きたミイラを作り出していたであろう、侘びしさ極まる灰色のキャンパスライフであった。

考えてみれば、高校3年生までの18年間、何一つとして桃色めいた出来事に遭遇しなかったこの私が、たかが大学に合格した程度で人生を180度変貌できると思ったのが大きな間違いである。私が如何に平々凡々なる生活を送ってきたか、分かりきった事実をこれみよがしに突き付けられている気分である。不愉快だ。不愉快極まりないが、誰を責め立てるわけにもいかぬ。強いて言うならば天のどこかにいるであろう神様に、なにゆえ私は毎年孤独の嵐が吹きすさぶ冬を過ごさねばならぬのですかと訊ねるまでだが、只でさえ人並以上に身も心も冷えきっているところを、外に出て神様の居所を探す勇気など私には無い。あっては困る。

だから私は我が家に一人炬燵に入り、年末番組でも観ながら蜜柑でも食していればよいのである。所詮、そのような運命の星の下に生まれたとすれば仕方の無いこと。

開き直るのもまた、然るべき判断である。

* 壱月

1月になった。年賀状が3枚届いた。両親からが1枚と、姉夫婦、そして室井からである。室井というのは同じ工学部に所属する知り合いで、サークル仲間でもある。交友関係が広いようで、友達の数と渾名の数が同じことで有名である。私としては、室井をそんなに捻った呼び名にするのは些か難しいところであるが、きっと私以外の彼の友人に、彼を室井と呼ぶ人はいないのだろう。一体何と呼ぶのか。気になるところではあるが、知ったところで何一つ役に立ちそうもないので未だ訊ねてみた事は無い。

私や室井が所属しているサークルは、自由に喋ったり遊んだり休んだりして、時々気が向いたときにお絵描きでもしましょう、というコンセプトの「美術サークル かんばす」である。元々美大を目指していた過去も持つ私はそのサークル名に惹かれてのこのこ着いていったわけだが、結果として私の予想は上下左右いずれにおいても遥かに超越する裏切られぶりであった。まず、部員が5人という閑散さ。そして主旨のあまりの緩さに、私がこのサークルに革命を起こさねばならんのではないかと要らぬ大志を抱きかけた。

私より30分早く「かんばす」に入った室井とはそこで初めて知り合ったわけであるが、彼はいつの間にか4つのサークルを股にかける男となってしまった。

時には広大なグラウンドで白球を追い掛け、時には書院造の和室にて抹茶を啜り、時には黒いマントを纏い意味不明な呪詛を唱えながら世界の平和を願い、時には談話に花を咲かせながら筆を握り創作に熱を注ぐという。種々雑多な彼の趣味と、そしてあらゆる方面に適應するたくいまれな才能には脱帽するところである。加えてその容姿も、非の打ち難い完成されたもので、こんなのが爽やかな汗を散らしたり、また和服姿で静かに茶に興じていたりするのを、きっと世の女は見たいのだろうと密かに思ったこともある。

事実、彼奴はもてるのだ。これこそが、私が彼を友人だと言わず「知り合い」に留めておきたい最大の理由である。とにかく、室井の顔の広さと、その好感度の高さに私は尊敬を乗り越えて恐れおののいた。生まれて初めて恐竜の存在を知ったときのような「いるわけないけど、いたら怖すぎる」という感覚を、まさか同い年の人間に対して思うとは、19年の人生の中で一度として考えたことが無かった。しかしそれほどまでに奴は、私を越えていた。恨めしく思う隙さえ与えず、悠々と私の頭上を飛び越していったのである。

数少ない工学部の女子生徒は例外なく彼に惚れ、そして同じ思いを秘めたる者たちが集まり、考え倦ねた挙げ句列を成して集団告白という行動をとったという。それは後日室井本人から聞いた話である。

「考えたよな。集団心理ってやつ、すごいよなあ」

一人一人丁寧に振っておきながら、自慢するでもなく私に報告してくる室井の隣で、私は戦慄を覚えたものである。もしも列を作られたのが私であれば、即座に目を回して卒倒するか、感動の

余り咽び泣くかのいずれかであろうと思い、それではあまりに女子たちに対して面目が立たぬ、もっと確と受け止めねば、と自分を叱咤激励したものだが、どう考えても未来永劫必要の無い叱咤激励であったことは想像に容易い。

そんなこんなで、私と肩を並べて歩いていいような人間ではないのだが、なぜか室井はいつも私の隣にいる。私とて室井がこの上なく不細工で、忌み嫌われるべき男であったなら「俺の隣にいるべきは麗しの美女なのに」と説得力の欠片もない愚痴を漏らすところであるが、「知り合い」とは言いつつも室井はいい奴であるし、何より誰が見てもキラキラと輝きを放っているの、一緒にいて悪い気はしないのである。

しかしこれは困りどころである。この室井という男が私の周りの環境を見せ掛けだけ彩ってしまうがゆえに、まるで私が素晴らしく輝きに満ちたキャンパスライフを送っているかのように感じさせ、私をこの状況に甘んじさせる。だが、そんなわけではない。私のキャンパスライフは、差し詰め墓場がプリントされたポストカードのような、侘びしさと寂しさに満ち溢れた生活である。家に帰れば痛いほどにその事実と直面し、ぼろぼろと涙と零しながら即席麺を啜った夜もある。私を理想と現実の狭間に置いてけぼりにする室井は、あるいは腹の底では私のことを笑っているのではないだろうか、と、そんなことさえ考えたこともある。有り得ぬ話ではない。なんせ彼には味方が多いのだから、それを利用して私を陥れようとするのはひどく簡単である。私の前向きな思考を守るための砂の城壁はあっけなく崩れ去り、私は失墜のどん底で体操座りをしたまま後生を過ごすことになるだろう。

しかしどうやらそれは、私の行き過ぎた懸念であったようである。今し方私の胸の内に燻る疑心は跡形もなく消え去り、大いに晴れ渡る気分であった。少々遅ればせながら私の部屋にも初日の出の陽が差したようである。思わず私は嘔き出して、そのまま暫く笑い転げた。目尻が涙に濡れるほど笑ったのは久しぶりのことである。新年早々腹を抱えて大笑いする人間は間違いなく変態であるが、しかし私を変態だと解釈するのは些か早計というものだ。私の手元には3枚の年賀状がある。3枚しか届かないことについては、今更嘆いたりもしない。内1枚は、きっと1万枚ほどの価値があるに違いなかった。それは室井から送られてきた年賀状である。私が、室井に思いを馳せている数多の女子たちの如く「室井くんからの年賀状には1万枚の価値があるわ」と言って葉書に頬擦りをしているような、気色の悪い想像をするのはやめて頂きたい。その年賀葉書には、宛名には間違いなく私の氏名と住所が記してあるのだが、そのまま裏返すと、私宛てだとは考え難い言葉が書いてある。奴の、特徴のある角張った字が、新春のお慶びを云々と印刷された文字の下に連なっている。再び読み返して、私はにやりとした。

『あけましておめでとうございます、天城さん

昨年は度々お世話になりました。特にクリスマスの茶会、あれは楽しかったですね。

年の初めに、あなたに伝えたいことがあります。

私は、天城さんに惚れています。

よければ恋人として、付き合ってもらえないかと思っています。

どうかご検討していただけないでしょうか。

そして今年が天城さんにとって素敵な一年となりますように。』

一応申し上げておくが、私は断じて、天城さんではない。

*

奇しくも、私は天城さんと旧知の仲であった。

彼女は私の通う大学の3年生であり、「かんばす」に所属するサークル仲間でもあり、また同じアパートに住むご近所さんでもある。室井には悪いが、腐れ縁という奴である。私がここに越してきた去年の4月、天城さん企画でアパート住人の皆さんに歓迎会を開いてもらったことがあるが、彼女の第一印象は、それはもう悲惨なものであった。

一言で表すならば、破天荒そのものである。

「小条くん！」

こじんまりとした歓迎会は、30分と経たぬ内に地獄絵図へと姿を変えた。ビール瓶を既に2本空にした天城さんは、焦点の合わない目をしながら私の名を呼ぶ。私が何度返事をしても知らぬ顔で名前を呼び続ける。そうして私は段々と恐怖を覚え始め、他の住人に助けを求めたのだが、時既に遅く、住人の方々は完全に出来上がった後であった。

後で知った話であるが、このアパートの住人は度重なる機会を経て下戸から上戸へ急成長を遂げるという。そんなことなど露も知らない私は怯えに怯えて一升瓶を抱えて部屋の端にうずくまるばかりであった。天城さんは容赦なく私の名前を叫び、真っ赤な顔に恐ろしい笑顔を湛えながら私に詰め寄る。

「小条くん、これはみんな通る道よ。さあ貴方も飲みなさい」

にじり寄る気迫から目を反らせば、視界を埋め尽くす屍の数々。

口論を始める者、歌って踊れる者、そして折り重なるようにして眠る者達――

「あの、俺はもう無理というか、天城さん」

私の必死な命乞いも、理性を忘れた鬼の目には、哀れな獲物としか映らないのだろう。天城さんは待ってましたとばかりに口角を上げ、新たなビール瓶の栓を抜いた。目を見開く私をよそに、天城さんは景気良くぐびりと一口飲んだ後、何を血迷ったか私の頭上で其れを逆様にしたのである。万有引力の存在するこの地球において、私の頭上で酒が濁流の如くうねり流れるのは当然というもの。一瞬にして私は麦酒まみれになる。絶望的な目で天城さんを見上げるも、地獄の鬼は狂乱の渦中であった。

「あははははは楽しいでしょう、楽しいでしょう小条くん。あはははは」

私のそれ以降の記憶はぷつぷつと途切れている。翌朝、アパートから1キロ程先にある公園のベンチで目を覚ますまでに一体何があったのか、そして酒など全く飲めなかった私とその日を境に蟒蛇になったのはなにゆえか、知りたくない過去は真っ黒くドロリとした姿形をして私の脳内に居座っている。

斯くして私と天城さんは初めて知り合ったわけだが、当然私の天城さんに対する印象は最底辺であった。世の中とは広大で、また恐ろしいのだと、私の胸中に癒えぬトラウマを植え付けたのはまごうことなき天城さんである。

そんな天城さんと構内で会ったのは、それから1週間ほど過ぎた頃であった。

「かんばす」の面々で集まっていたときに、ひょっこり現れたのである。室井は顔見知りだったらしく、茶道のサークルにも入っているのだとその時教えられた。あの悪夢からは想像もできぬ可憐さを纏っており、私は危うく自分の記憶の方が怪しいのではないかと疑るほどであった。しかしそんなはずはなかったのである。

新入生歓迎コンパというものがある。私は大学生気分には浮かれて何も考えず参加したのだが、自分の素行を恥じ入るべきであったと直ぐさま後悔の念に駆られた。天城さんもその席にいたのである。思えば、室井がこの日急用で不参加だったのは幸運である。彼がいつ天城さんに惚れたのかは知る由もないが、きっと酒乱の天城さんというのは、彼の脳内にあるまじき記憶であろう。ともかくその日も例に漏れず天城さんは暴徒と化した。慌てふためく新入生の頭に麦酒をぶちまけながら、狂ったように酒を煽る。2年生以上の先輩は慣れたもので、まるで孫の晴れ舞台を見守る祖父母さながらの温かい眼差しを送るばかりであった。経験というのは偉大であると、私は思わざるを得なかった。私ももう、娘を嫁に出す父親くらいには昇格していたかもしれない。

傍らで、彼女に無限大の夢を抱いていた同回生の悲痛な叫びがきこえた。

「先輩、天城さんっていつもこうなんですか」

「そうだなあ。俺が入学したときはもうこんな感じだったな」

「大人しそうなのに。見た目はあんなに清楚なのに」

「ははは。人は見かけによらないものだろう」

寛容な面持ちで笑った先輩の顔面に、麦酒が容赦なく降り掛かった。

*

この葉書さえあれば、私は室井という男を手の中に納めることが出来る。
奴の弱味を握るということは、彼を知る全ての人間をこの手に握ることと等しい。
室井さえ抑えれば、私は大学の王へと君臨したも同然と思えた。
食堂を陣取り、足を組んで椅子に座る私の前には、膝をついて謙る室井の姿がある。
貢ぎ物の昼食を届けにきているのである。

「小条様、受け取り下さいませ」

「よかろう、下がり給え」

ふむ。中々悪くはない――

と、そこまで思考したところで私は我に返った。

なんと愚劣な妄想であることか。私は自らの器量の小ささを恥ずべきである。

室井を陥れるなど言語道断の悪行であることに違いない。そんなことに手を染めれば、吊るし上げられるのは紛れもなく私であり、冷ややかな視線を頂戴するのも紛れもないこの私であろう。

いけないいけない。日本男児たるもの、器と顔は広いにこしたことはないのである。

「室井は天城さんに惚れているのか。成る程、それは真に情趣があって良いではないか」

私は頷いた。葉書を懐へしまう。

室井の家へと向かわねばならぬ。

*

「なんだと」

「だから、それは俺が俺の意思でお前に送ったんだ」

「悪趣味な奴だな。いったい何のために」

「こうすればお前が家に来ると思ったからだよ」

室井は鼻高々に告げた。どうやら、手の内に握られていたのは私の方だったようである。

不愉快極まりない。こんなことならそそくさと、天城さんを含む彼の知り合いに逐一報告に行くべきであった。そうして羞恥と失墜にまみれた室井を指差して笑い、未来永劫語り継いでいけばよかったのである。我ながら、度の過ぎたお人好しであることを自覚せねばならんのかもしれぬ。

「なあ小条、協力してくれ。頼む」

室井が私に頭を下げている。成る程、こいつが異様なまでも私の隣に居座っていたのは、今日という日のためであったのか。同じアパートで暮らす私を協力者として近くに置いておくのは、室井からしてみれば二重の意味で安全である。自分の恋を叶える近道になる上、私が彼女に惚れるのを防ぐことも出来る。無論、後者はまず有り得ないことを声を大にして告げる必要があるが。

「別にいいけど」

さして困ることはない。強いていうのなら、酒乱となった天城さんと初対面した室井が私を責め立てる場面を、大いに予想できることくらいである。

「本当か！？それはよかった。いい友達を持ったよ、俺は」

室井が浮かれた声を上げる。私に抱き着く。大変鬱陶しかったので即座に剥がした。生憎だが俺はお前を「知り合い」としか思っていないぞ、と言い返しそうになったが、協力体勢が整ってから僅か30秒後に破滅するのは中々の痛手だと思われたので憚った。私とて、恋に迷える子羊を路傍に放り出せる程非情な人間ではない。加えて何度もいうが、室井は友達にこそしたくないものの、いい奴なのである。それは1年という月日が物語っていると言っていい。室井の窮地を救えば、必ず恩が倍になって私の元へ帰ってくるという根拠の無い確信があった。室井は、そういう人間である。

「で、俺はなにをすればいいんだ」

私は訊ねた。まさか正月早々に勧善懲悪ごっこというわけにもいかぬだろう。それに私が悪い役人を演じるのは御免被るところであるし、天城さんを捕らえた暁には、きっと私のアパートが真っ赤に染まること請け合いである。勿論、私の血液で。

「とにかく、天城さんと仲良くなってくれ」

突然真面目な顔をして室井は言った。私を含めた3人で仲良しごっこを始めることが室井の作戦のスタートらしかった。天城さんと2人きりになるのは少し恐ろしいと零す室井の言い分にはひどく賛同できたが、それではただのお友達までしか昇格できないのではないかと私は指摘する。

「心配ない。彼女はきっと俺に運命を感じているはずだ」

ここではないどこかを見つめて、恍惚の表情で室井は告げた。

どうやら室井もまた根拠の無い確信に夢を抱いているようであった。

私は密かに呆れる。未来を描く夢見人の切なきなり、かな。

*

アパートへ帰り、今更天城さんと築く仲なんてものは果たして存在するのだろうかと途方に暮れ、かといって室井の頼みを華麗に水に流すことも憚られた私は、善は急げと天城さんの部屋を訪ねた。彼女の部屋を訪れるのはこれが2度目である。1度目は言わずもがな、あの忌々しい暗黒の歓迎会である。天城さんの部屋は、私の部屋がある階より2つ上の3階に位置しているが、階段を上るうち、忘れがたきトラウマが私の神経を逆撫でし始めた。こう言ってはなんだが、私は出来ることなら天城さんとは二度と関わり合いになりたくないのである。飛んで火に入る夏の虫の如く、真冬に諸悪の根源を訪問している私の愚かさといったら、それこそ顔面に浴びるほど麦酒を頂戴しても文句の一つも言えまい。沸々と込み上げる怒りの責任者は存在しない。背筋には悪寒が走る。この8ヶ月と少し、私が敢えて踏み入ろうとしなかった未知の領域に、今私は向かっているのである。

辿り着いた3階の廊下は薄暗く、所々判別しがたいがらくたなどが放置されており、ここが無法地帯であることを物語っていた。天城さんの部屋は廊下の1番奥の、305番である。初めてここを訪ねたときに見た彼女の清楚で可憐な微笑みは、僅か30分程度で消え失せてしまったが、思えば普段の天城さんは確かに綺麗であった。室井でなくとも、世の単純な男が心奪われるのも頷ける。アルコールさえ与えなければ至上の女神ともいえる人が、無類の酒好きというのは実に皮肉である。私は、日が暮れる前から天城さんが酒に溺れていないことを切に祈りつつ、305番のドアを叩いた。

「はあい」

「...小条です」

私の切実な望みは天に通じたようである。扉の向こう側から聞こえた天城さんの声は、他人に酒をぶちまけることを人生最高の至福とする鬼の鳴き声とは異なった、ひどく透き通り凜とした声であった。私はほっと胸を撫で下ろす。これで懸念の9割は消えたも同然である。

「あら、どうしたの小条くん。なにか急な用事？」

開かれたドアの先に立っていた天城さんは、上下スウェットというラフな恰好をしており、おまけにくわえ煙草という中々な出迎え方を私に教えてくれた。新歓コンパのときは真っすぐ腰まで下ろされていた長い髪が、今は後ろで括られている。やはり天城さんはどこまでいっても天城さんである。

しかしそこでふと思う。もしかするとこれは私にしか見えない幻影ではないだろうか。実際の天城さんは世界が唸るほどの美貌を湛えた史上最高の女性であり、凶暴かつ破天荒な一面など持ち合わせているはずがないのではないか。天城さんのあまりの輝きに目が眩んで、私の目はなにか間違っただけのものを映し出しているのだ。そうに違いない。

「今から飲むとこだけど、小条くんも一緒に一杯やってく？」

「.....お断りします」

悲しきかな、私が見ているのは現実であるようだ。

私が45度丁寧に腰を折り畳んで、またの機会に伺おうと心に決めたとき、天城さんの立つ玄関に1つだけ不似合いなミュールがあることに気付いた。その異様なオーラを醸し出すピンクのミュールを除いて、他の靴は薄汚れたスニーカーやスーパーで売っている布サンダルなど、質素そのものといった統一感に溢れているのだが、ただ一足だけ高級感漂うミュールに、私は一瞬目を奪われた。

「なに見てるの、靴？あ、それはね」

私の視線を察した天城さんが口を開いたときである。

「お客さんですか？」

おびたしい洗濯物の山に隠れて死角となっていた部屋の奥から、ひょっこりと顔を出した女性が1人。小柄で、天城さんと頭2つ分ほども背丈が足りていない。肩にも届かない短い髪は、内側にくるんと丸く揃えられており、どこか丸い果物を連想させる。林檎である。彼女の着ているワンピースが赤いから、そんなことを考えるのかもしれない。ともかく、酒とごみに荒んだこの場所に、ミュール同様不釣り合いな人物であることは間違い無い。

そしてこれこそが、私と御崎さんの、運命の出会いなのである。

*

「御崎ちゃんは、私の同級生。で、小条くんの同級生」

「すみません意味が分かりません」

結局、天城さんの部屋に上げられてしまった。周囲をごみとしか判断できないがらくたに囲まれ、生活感に溢れ過ぎて最早生活感の欠片もないような部屋で、どうにか3人分の居場所を作りきゅうきゅうになって座っている状態である。実に居心地が悪い。その上天城さんは何かもったいぶった口調で喋るから余計に質が悪い。私のこめかみも中々な耐久性を保持しているものである。

「なんて言ったらいいかな。言うなれば、時空を越えた大学生ね。私の同級生だった日はいずこへ、今は2つも年下になってしまって。中々やるでしょ、この子」

自慢の娘です、みたいな顔をされても困る。要は二浪中ということではないか。2つも年上なのに同じ学年とは、これ如何に。かける言葉を探す内に気まずさが最高潮に達し、私は危うく他人の家で目を回しかけた。

「お気になさらないで下さい。別になんてことありませんから」

「ですが、しかし…」

「私、勉強はからっきしですが、大学は大好きなんです。留年生の鏡みたいなもんです」

留年する人間に鏡なんてものがあっては適わないと思うが、胸を張って告げる御崎さんを見るとその全てが正当なように感じる。ほわほわと宙を漂う私の隣で、天城さんは早くも缶ビールを2本空け、虚ろな目をしている。危険信号である。この部屋がアルコールに塗れようが知ったことではないが、御崎さんは何としてでも死守せねばならぬ。

私は「逃げましょう」と視線で御崎さんに合図を出す。しかし御崎さんは穏やかな顔をして、ピッチを上げてゆく天城さんを見守っている。生まれたての子鹿が初めて立つ瞬間を目の当たりにしているかのような、幸福に溢れた表情である。

「お酒飲めないものですから。人が飲むのを見るのって、気持ちいいですよね」

いたって彼女は真面目である。これも慣れの成せる技であろうか。だとしたら私がここに居合わせるのは非情に危険である。きっと御崎さんは麦酒でも焼酎でもシャンパンでもぶっかけられたところで、笑顔一つ絶やさないのであろう。私は依然そんなところまで辿り着いていない。

「ところで、小条さんは何か御用があったのでは？」

逃げ出す準備をしていたところで、罪の無い御崎さんの言葉が私の心臓を貫く。同時に、室井の爽やかな笑顔が私の脳内に幾度となくフラッシュバックした。今回ばかりは苛々する爽やかぶりである。いっそのことカクテルにでもなって天城さんにぶちまけられてしまえ、とまでこっそり罵倒してから、私は座り直した。ここで逃げ出しては、室井に合わせる顔が無い。そんなものは無かったところで一向に構いはしないものの、一応の格好をつけて、私は御崎さんと居る道を選んだ。

魔が刺したというべきか、運命が手招きしているのを見つけたというべきか、どうやら私はこの

人に惚れたようである。やんぬるかな、ミイラ取りが喜んでミイラになっているようなものだ。しかしそんな仕様もない事實は、全て御崎さんの笑顔に眩んで消えてなくなった。今の私からしてみれば、百年後の天気と同じくらいにどうでもよいことである。ああ、私は生まれてこの方、もう少しで成人になんなんとするこの身分でありながら、斯様にも美しく可憐な女性に出会ったことがあったろうか。いや無い。あったわけがない。なぜなら、目の前で眩く輝いているこの女性こそが、まさしくこの世の美女のトップに君臨するのだと断言できるからだ。世の中に美しい女は大層おろう。愛くるしい女もおろう。幸い酔い狂う前に眠りについた天城さんも、言わずもがなその部類に分けられることは間違い無い。だが、ここまで男を魅了する要素を持ち合わせている女性は決して多くない。むしろ、ここにしかいない。やれ恋は盲目だの、やれ誇張が過ぎるだのと揶揄されても構わない。私は本当に、一瞬の内に、彼女を好きになってしまったようなのである。

「天城ちゃん、寝ちゃいましたねえ」

「そのようですね...」

「あれ、小条さんも飲まれましたか？」

「え、いえ、俺は」

「なんだかお顔が赤くなっておられますよ」

御崎さんから素朴な指摘を受け、私は目を反らした。そんなことは私が一番知っている。自慢ではないが、すぐ顔に出るタイプなのである。嘘など吐く前から見破られる有り様であるゆえ、恋の駆け引きなどというリスクの高い行為はさっぱり分からない。きっと私は恋愛の対象精神年齢に達していない。

「じゃあ、俺はこれで...」

室井のアプローチを応援するためにやってきたのが、何の成果も上げぬまま自ら恋に落ち、目的の天城さんは寝姿までも豪快で、御崎さんはやはり可愛らしく、私は一体何をしにここを訪れたのかすっかり忘れて立ち上がった。

その拍子に、着ていたトレンチコートのポケットから紙が二枚舞い落ちる。ポケットに入れていたことなど、完全に記憶から抹消されていたその紙きれを拾い上げたのは御崎さんであった。

「水族館、ですか。いいですね」

どうぞ、と差し出すその顔の周りに咲く花たちよ。私はここに運命を感じずにはいられない。室井から「天城さんとの初デートは水族館がいいんだ」と預かっていた二枚の無料招待券は、今私と御崎さんとの間にある。私達を繋ぐ架け橋のようである。

「よかったら、一緒に行きませんか」

口を突いて出た言葉は、丁と出るか半と出るか。重なった二枚の券を握る私の手の少し向こうには、同じく券を握る御崎さんの小さな手がある。一世一代の告白をしたつもりの私に、御崎さんは微笑んだ。

「是非」

高鳴る私の胸に、室井の爽やかな顔が浮かんで、消えた。